

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比  前月比 

- ・EU 等で上方修正されたものの、米国、アルゼンチンで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

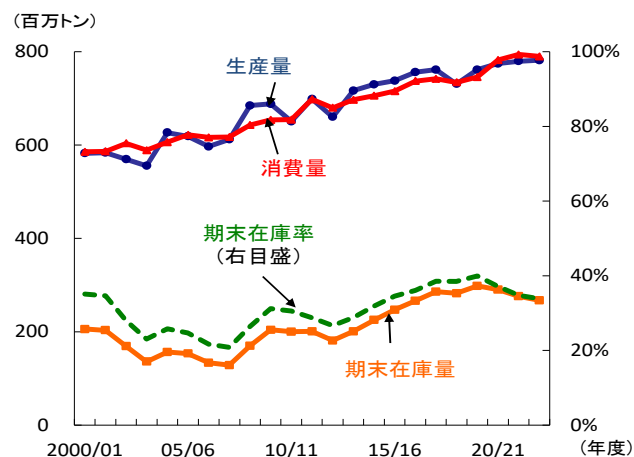
消費量 前年度比  前月比 

- ・EU で上方修正されたものの、米国、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比  前月比 

- ・EU 等で上方修正されたものの、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2022. 10. 12）をもとに農林水産省にて作成

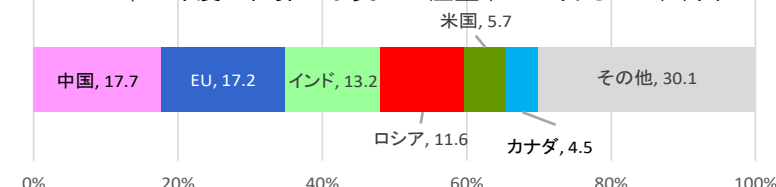
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

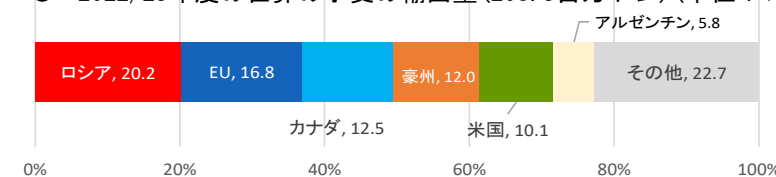
年 度	2020/21	2021/22 （見込み）	2022/23		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	774.5	779.8	781.7	▲ 2.2	0.2
消 費 量	782.2	794.2	790.2	▲ 0.9	▲ 0.5
うち飼料用	158.1	161.0	155.5	0.3	▲ 3.4
輸 出 量	203.4	202.8	208.3	▲ 0.6	2.7
輸 入 量	195.4	197.9	203.9	▲ 0.3	3.0
期末在庫量	290.4	276.0	267.5	▲ 1.0	▲ 3.1
期末在庫率	37.1%	34.8%	33.9%	▲ 0.1	▲ 0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 （12 October 2022）

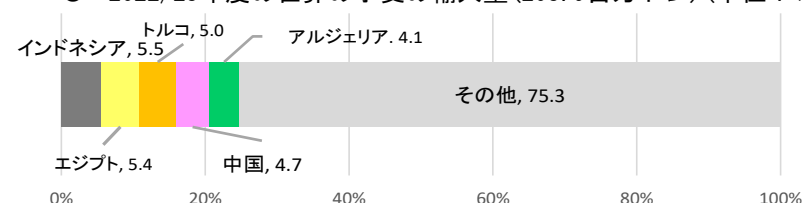
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量（781.7百万トン）（単位：%）



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量（208.3百万トン）（単位：%）



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量（203.9百万トン）（単位：%）



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は前月予測に比べ 3.6 百万トン下方修正の 44.9 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測から 3.6 百万トン下方修正され 44.9 百万トンと 2003/04 年度以降で 2 番目に少なく、前年度に比べ 0.2% 増加に留まった。

作期別には、冬小麦、春小麦とも収穫面積と単収が引き下げられたことから、冬小麦の実生産量は前月予測に比べ 2.6 百万トン下方修正され 30.0 百万トン、春小麦は前月予測に比べ 0.8 百万トン下方修正され 13.1 百万トン。デュラム小麦は、収穫面積の引き下げから、前月予測に比べ 0.2 百万トン下方修正され 1.7 百万トンの見込み。なお、前年度に比べると、2022/23 年度の冬小麦は 5 年平均(33.9 百万トン)を上回るものの、主要生産地の干ばつの影響で生産量が減少し、前年度を 13.6% 下回る。春小麦、デュラム小麦は降雨過多による播種遅延があったものの、前年度の乾燥により減少した生産量から回復。春小麦は 5 年平均(13.7 百万トン)を下回ったものの前年度を 45.7% 上回る。デュラム小麦は 5 年平均(1.6 百万トン)、前年度(69.9%)を上回っている。

「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、10 月 16 日時点の 2023/24 年度冬小麦の主要生産 18 州の作付進捗率は、69%と前年度(69%)並で、5 年平均(68%)を上回っている。HRW(ハード・レッド・ウインター)の主要生産州であるテキサス州では 70%と 5 年平均を 7 ポイント上回るものの、オクラホマ州で 53%、カンザス州で 64%と、それぞれ 5 年平均を 13 ポイント、2 ポイント下回っている。

国際価格の高さは播種面積拡大のインセンティブとなる一方、生産者は投入コスト上昇や干ばつに直面している。また、米国東部の SRW(ソフト・レッド・ウインター)の生産地であるイリノイ州、インディアナ州の作付進捗率も、それぞれ 39%、47%と 5 年平均の 51%、52%を下回っている。一部地域では大豆の収穫後に小麦を作付けしているため、大豆の収穫遅延が小麦の播種遅延要因となっている。なお、冬小麦の同日時点の発芽進捗率は 38%と前年度(42%)、5 年平均(44%)を下回った。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測から 1.4 百万トン下方修正され、21.1 百万トンとなる見込み。8 月の輸出量は 2.9 百万トンで、輸出先国は、中国(15.8%)、メキシコ(13.1%)、ナイジェリア(8.7%)、フィリピン(8.6%)の順。

期末在庫量は、前月に比べ 0.9 百万トン下方修正され、2008/09 年度以降で最低の 15.7 百万トンの見込み。なお、期末在庫率は 2014/15 年度以降最低の 30.9%(P5 注目情報参照)。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

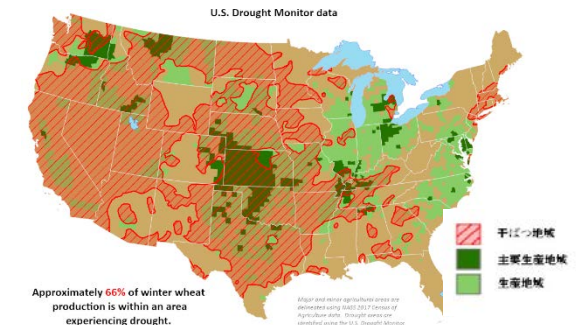
(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	44.9	▲ 3.6	0.2
消費量	30.4	30.4	29.6	▲ 0.8	▲ 2.6
うち飼料用	2.5	2.3	1.4	▲ 0.8	▲ 41.6
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	▲ 1.4	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	0.3	26.3
期末在庫量	23.0	18.2	15.7	▲ 0.9	▲ 13.9
期末在庫率	40.0%	34.9%	30.9%	▲ 0.5	▲ 4.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	▲ 0.83	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	▲ 0.07	5.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 October 2022)

図 米国の冬小麦生産地帯の干ばつ状況(2022. 10. 11)



資料：USDA 「Drought Monitor」(2022. 10. 11)

図 米国産小麦の輸出先国別輸出量

2022年8月			2022年1月～8月		
国名	検証高(万トン)	シェア(%)	国名	累積検証高(万トン)	シェア(%)
中国	45.1	15.8	メキシコ	311.9	19.0
メキシコ	37.4	13.1	フィリピン	194.8	11.9
ナイジェリア	24.9	8.7	日本	173.9	10.6
フィリピン	24.6	8.6	ナイジェリア	106.2	6.5
日本	20.7	7.3	韓国	89.8	5.5
その他	132.5	46.5	その他	762.8	46.5
合計	285.2	100.0	合計	1,639.4	100.0

注1. 9月の輸出検証高は、9月8、15、22、29日の合計値

注2. 2022年累積輸出検証高は、2022年1月6日～9月29日の合計

資料：USDA Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals (2022年10月12日)より作成。

< カナダ > 生産量は回復し、前年度比 55.6%増、過去 5 年平均比 14.3%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.10.21)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、34.7 百万トンの見込み。生産量は、収穫面積と単収の引き上げから、カナダ西部の干ばつにより生産量が減少した 2021/22 年度に比べ 55.6%増加する見込み(過去 5 年平均対比 13.3%増)。

このうち、普通小麦、デュラム小麦はともに、前月予測からの変更はなく、それぞれ 28.6 百万トン、6.1 百万トンの見込み。前年度に比べ、播種面積、単収の引き上げと改廃率の低下から、普通小麦は 48.4%増加し(過去 5 年平均対比 11.9%増)、デュラム小麦は 101.3%増加する見込み。(過去 5 年平均対比 20.6%増)。現時点では、普通小麦は含有タンパク質が 14.1%と前年度より低下するものの、5 年平均(13.5%)を上回り、大部分が 1～2 等に格付けされる見込み。また、デュラム小麦も含有タンパク質が 14.5%と前年度より低下するものの、5 年平均(14.3%)をわずかに上回り、大部分が 1～2 等に格付けされる見込み。

AAFC 及び主要生産各州の政府報告によれば、サスカチュワン州及びアルバータ州では収穫が終了した。また、マニトバ州では、10 月 18 日現在、春小麦の収穫進捗率が 98%である。なお、アルバータ州産小麦の品質は、春小麦が 5 年平均を上回るものの、デュラム小麦は下回った。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 54.0%増加の 23.3 百万トン。

そのうち、普通小麦は前月予測から 0.1 百万トン上方修正され 18.3 百万トンと、生産量の回復と主要輸出国の輸出減少から、前年度に比べ 47.4%の増加。また、デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく 5.0 百万トンと、生産量の回復、高温・乾燥の影響を受けたイタリアや北アフリカ(特にモロッコ)等の需要増が見込まれることを受け、前年度に比べ 84.1%の増加。なお、デュラム小麦の輸出ペースは、在庫量が引き締まっているため低調であった。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23 年度(2022 年 8 月～2023 年 7 月)の 8 月の輸出量は普通小麦が 1.0 百万トン、デュラム小麦は 0.1 百万トンの計 1.1 百万トン。輸出先国は、普通小麦が中国(21.4%)、日本(12.7%)、バングラデシュ(11.8%)、デュラム小麦は、イタリア(44.2%)、米国(19.6%)、モロッコ(16.4%)の順。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

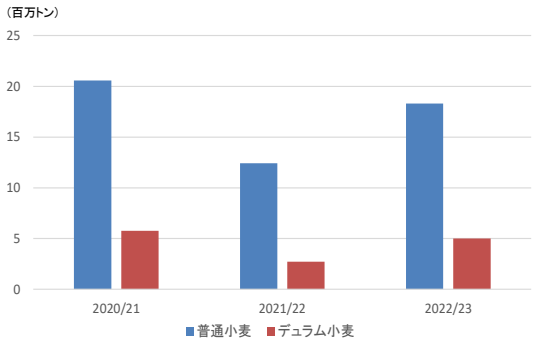
(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年8月～23年7月)		
			予測値、() は AAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	35.4	22.3	35.0 (34.7)	-	57.0
消 費 量	9.1	10.2	9.1 (9.0)	-	▲ 10.6
うち飼料用	4.2	5.2	4.0 (4.6)	-	▲ 22.8
輸 出 量	26.4	15.0	26.0 (23.3)	-	73.3
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-
期末在庫量	6.0	3.7	4.2 (6.2)	-	13.6
期末在庫率	16.7%	14.6%	11.9% (19.2%)	-	▲ 2.7

(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.19	10.00 (34.70)	-	8.8
単収(t/ha)	3.54	2.43	3.50 (34.70)	-	44.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 October 2022)

図 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出量の推移



資料：カナダ農務農産食品省「AAFC」(2022. 10. 21)にデータをもとに農林水産省で作成

図 カナダ産小麦の輸出先国別輸出量

< 普通小麦 >

< デュラム小麦 >

2022年8月			2022年8月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
中国	21.5	21.4	イタリア	5.9	44.2
日本	12.8	12.7	米国	2.6	19.6
バングラデシュ	11.9	11.8	モロッコ	2.2	16.4
スペイン	9.0	9.0	スペイン	1.1	8.1
インドネシア	7.7	7.7	ペルー	0.9	6.7
その他	37.6	37.4	その他	0.7	5.0
計	100.5	100.0	計	13.4	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2 普通小麦の: 品種はNO.1-3 Canada Western Red Spring No.1 Canada Western Red Winter
No.2 Canada Eastern Red Spring No.2 Canada Eastern Oter, デュラムは Canada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」(2022.10.2)をもとに作成。

＜ 豪州 ＞ 生産量は史上 2 番目の 33.0 百万トン、輸出先国は中国が増加

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、33.0 百万トンと史上最高の前年度(36.4 百万トン)を 9.2%下回るものの、史上 2 番目となる見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.9.6)によれば、2022/23 年度の主要生産州別の生産量は、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)では、10.2 百万トンと前年度に比べ 20%減少するものの、過去 5 年平均を 50%上回る。作付期には天候に恵まれたものの、一部地域では 6 月に降雨過多となり、現地情報によれば、さらに最近の降雨の影響で小麦生産量の約半数の品質が低下し、飼料向け小麦が予想以上に発生する可能性がある。

西オーストラリア州(WA 州)では、史上最高であった前年度に比べ 14%減少の 11.0 百万トン。5 月、6 月の理想的な生育条件で作付けが順調に進み、その後の平年を上回る気温や、7 月後半と 8 月の降雨で単収は良好となる見込み。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.10.6)によれば、9 月の天候が生育に非常に適していたため、2022/23 年度の WA 州の実生産量は 12.1 百万トン(前月 10.8 百万トン、前年度 12.9 百万トン)の見込み。小麦の播種面積は、一部がなたねにシフトし減少したものの、降水量の少なかった地域でも予想以上の単収となる可能性があり、南部地域でも更に生産量が増加する可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は前月予測からの変更はなく、25.0 百万トン。前年度(27.5 百万トン)に比べ 9.1%減少するものの、前年度に次ぎ史上 2 番目となる。

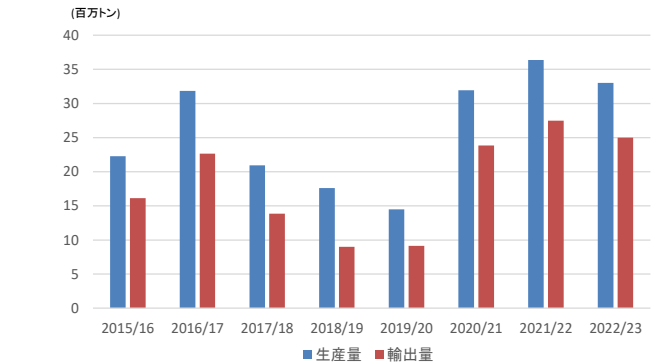
豪州統計局によれば、2022 年 8 月の輸出量は 2.5 百万トンと、前月(2.6 百万トン)に比べ減少。輸出先国は、インドネシア(17.6%)、フィリピン(16.7%)、ベトナム(12.8%)、中国(12.2%)の順。

また、2022 年 1 月から 8 月までの輸出量は 20.6 百万トンで、輸出先国は、中国(20.8%)、インドネシア(13.1%)の順。豪州は、これらのアジア諸国向けを中心に輸出をしているが、特に前年に 2.9 百万トンであった中国向けの輸出量は、すでに 8 月までに 4.3 百万トンまで増加している。現地情報会社によれば、中国は蒸しパン等に中国産と同程度のタンパク質含有量の豪州産を輸入している模様。

なお、3 年連続の豊作の見通しの豪州産穀物等への需要は高いが、ウクライナからの黒海経由の輸出が再開されたこと等から需給は緩和されているものの、穀物等輸出のサプライチェーンの状況や豪州産穀物等の作柄について引き続き注視が必要。

小麦一豪州		(冬小麦を主に栽培)			(単位:百万トン)	
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	31.9	36.4	33.0 (32.2)	-	▲ 9.2	
消 費 量	8.0	8.5	8.6 (8.4)	-	0.6	
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (4.8)	-	-	
輸 出 量	23.9	27.5	25.0 (25.0)	-	▲ 9.1	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	-	
期末在庫量	3.0	3.5	3.2 (3.7)	-	▲ 10.0	
期末在庫率	9.3%	9.7%	9.4% (11.2%)	-	▲ 0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.64	13.04	13.10 (13.1)	-	0.5	
単収(t/ha)	2.52	2.79	2.52 (2.47)	-	▲ 9.7	
資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 October 2022) IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)						

図 豪州産小麦の生産量、輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2022.10.12)をもとに農林水産省で作成

表 豪州産小麦の輸出先国別輸出量

2022年8月			2022年1月～8月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
インドネシア	44.4	17.6	中国	427.8	20.8
フィリピン	42.0	16.7	インドネシア	270.5	13.1
ベトナム	32.2	12.8	フィリピン	241.4	11.7
中国	30.8	12.2	ベトナム	229.0	11.1
韓国	17.3	6.9	韓国	136.2	6.6
その他	85.1	33.8	その他	754.4	36.6
合計	251.8	100.0	合計	2,059.3	100.0

資料:豪州統計局のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ EU27+英国 ＞ 小麦の飼料用需要がとうもろこし等の代替で上方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.9.30)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 1.3 百万トン上方修正されたものの、前年度に比べ 2.5%減少の 135.4 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、ハンガリー等で下方修正されたものの、ポーランド等で上方修正されたことから、前月予測に比べ 1.1 百万トン上方修正の 128.0 百万トン。デュラム小麦は、イタリア等で上方修正されたことから、前月予測から 0.2 百万トン上方修正の 7.4 百万トン。

また、USDA によれば、EU27 の生産量は、前月予測から 2.7 百万トン上方修正され、134.8 百万トン、英国の生産量は前月予測からの変更はなく、14.6 百万トン。

フランスアグリメール(2022.10.12)によれば、2022/23 年度のフランス産普通小麦の品質は、タンパク質含有量が 12.4%(5 年平均に比べ 0.6 ポイント減)、容積重が 78.2 キログラム/ヘクトリットル(同 0.5 ポイント増)、水分含有量が 12.0%(同 0.9 ポイント減)となった。

9 月中旬から 10 月初旬にかけて、欧州の大部分で降雨があり土壌水分が供給された。フランスでは、10 月 10 日現在、2023/24 年度の普通小麦の播種は良好な天候に恵まれ、播種進捗率は 21%と前年度同時期 11%を上回っている。また、気温が高く発芽も順調に進んでいる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、干ばつによるとうもろこしの減産から、EU27 における小麦の飼料用需要は前月予測に比べ 1.0 百万トン上方修正され 45.0 百万トンの見込み。

なお、フランスアグリメール(2022.10.12)によれば、フランス飼料メーカの小麦、大麦、とうもろこしの使用量合計は、ここ 3 年間は減少傾向となっているが、2020/21 年度から 2022/23 年度の小麦の使用割合は、49.7%、53.7%、54.7%と増加傾向にある。USDA によれば、飼料用消費は、鳥インフルエンザの影響、エネルギーコストの高騰、環境負荷による飼育制限等から減少している。

EU27 の輸出量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 35.0 百万トンと、7 月の高温乾燥で生産量は減少したものの、ウクライナの輸出減少分のシフトから前年度に比べ 9.7%増加の見込み。

欧州委員会によれば、2022/23 年度(2022 年 7 月から 2023 年 6 月)のうち、2022 年 7 月の輸出量は、普通小麦が 282.6 万トン(前年度同月 147.6 万トン)、デュラム小麦が 6.1 万トン(同 2.5 万トン)。

輸出先国は、普通小麦がモロッコ(28.2%)、アルジェリア(13.9%)、デュラム小麦がアルジェリア(50.8%)、リビア(18.0%)の順となっており、輸出先はアフリカ諸国が中心となっている。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

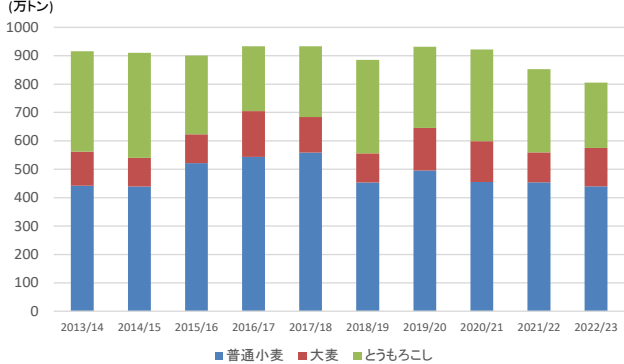
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.4	152.3	149.4 (147.9)	2.7	▲ 1.9
消 費 量	118.2	123.7	124.4 (121.5)	0.7	0.6
うち飼料用	48.5	52.4	52.6 (49.1)	1.0	0.4
輸 出 量	30.2	32.7	36.0 (37.2)	1.5	10.0
輸 入 量	8.6	7.2	7.5 (6.9)	-	3.6
期末在庫量	12.1	15.2	11.7 (14.4)	0.4	▲ 23.0
期末在庫率	8.2%	9.7%	7.3% (9.1%)	▲ 0.1	▲ 2.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	22.97	24.25	24.00 (25.78)	▲ 1.80	▲ 1.0
単収(t/ha)	5.94	6.28	6.22 (5.74)	0.06	▲ 0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)
表内及び () 内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

図 フランスの小麦、大麦、とうもろこしの飼料用途の推移



資料：FranceAgrimer (2022. 10. 12) をもとに農林水産省で作成

表 EU27 の普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量

(普通小麦)			(デュラム小麦)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
モロッコ	79.7	28.2	アルジェリア	3.1	50.8
アルジェリア	39.4	13.9	リビア	1.1	18.0
パキスタン	21.7	7.7	コートジボワール	0.8	13.1
ヨルダン	17.9	6.3	サウジアラビア	0.3	4.9
エジプト	17.9	6.3	アイスランド	0.2	3.3
ナイジェリア	15.8	5.6	マリ	0.1	1.6
その他	90.2	31.9	その他	0.5	8.2
計	282.6	100.0	計	6.1	100.0

EC(欧州委員会)「Cereals exports and imports」(2022. 9. 25) をもとに農林水産省で作成。

< 中国 > 8月の小麦輸入先国のシェアは豪州が86.1%

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.10.9)によれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ1.1%増加の138.4百万トンの見込み。作期別には、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、生産量はそれぞれ131.9百万トン(対前年度0.4%増)、6.5百万トン(同17.7%増)の見込み。最近3年の冬小麦の作付面積は約22.0百万ヘクタールで安定しているが、市場で需要のある高品質小麦の作付面積が増加しており、2022/23年度は高品質小麦の冬小麦全体の作付面積に占める割合は前年度より1.2ポイント増加し、38.5%となった。

中央气象台によれば、10月13日現在、2023/24年度の冬小麦の播種進捗率は18.0%で、前年同期(11.4%)に比べ6.6ポイント進んでいる。2022/23年度は、冬小麦の播種時期の頻繁な降雨から、例年に比べ播種進捗率は遅れたが、2023/24年度は全国の冬小麦生産地で発芽に適した天候、土壌水分に恵まれている。中国糧油情報センターによれば、冬小麦の播種面積は前年度並みの見込み。

現地情報会社によれば、国内小麦価格の上昇で農家の収益が向上したため、栽培のコスト増による2023/24年度の播種面積への影響は少ないと見られる。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月からの変更はなく、前年度(9.6百万トン)から18.4%減少の7.8百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2022年8月の輸入量は、前年度同期(70.5万トン)を25.8%下回る52.3万トンで、輸入先国は、豪州が45.1万トン(86.1%)で大部分を占めている。なお、ロシアは560トン(0.1%)で、同国からの輸入実績は5月(58トン)以来となった。また、2022年1月～8月の輸入量は、前年度同期(693.0万トン)を10.5%下回る620.3万トンで、輸入先国は、豪州、フランス、カナダの順で、この3ヶ国で99.7%を占めた。現地情報会社によれば、豪州からの高い輸入シェアの要因は、豪州産の豊作と2年連続で好天に恵まれ品質が安定していることとみられる。

国家发展改革委員会(2022.9.30)によれば、2023年の輸入関税割当は、963.3万トンで、輸入割当内の関税は1%、輸入割当外の関税は65%。また、割当数量の内、90%が国営企業枠となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2022年8月号」によれば、8月は、国内市場においては、大部分の備蓄倉庫の入れ替え作業が終了し、小麦粉加工企業の需要が主であるが、小麦価格がとうもろこしより高いことから飼料用需要が減少し、需給に余裕があり、国内小麦価格は概ね安定した。

小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.3	137.0	138.0 (138.0)	-	0.8
消 費 量	150.0	148.0	144.0 (141.1)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (26.5)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	9.5 (8.4)	-	▲ 0.7
期末在庫量	144.1	141.8	144.4 (137.5)	-	1.8
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.6% (96.7%)	-	4.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.60 (23.6)	-	0.1
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.85 (5.84)	-	0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図 中国の小麦需給の推移

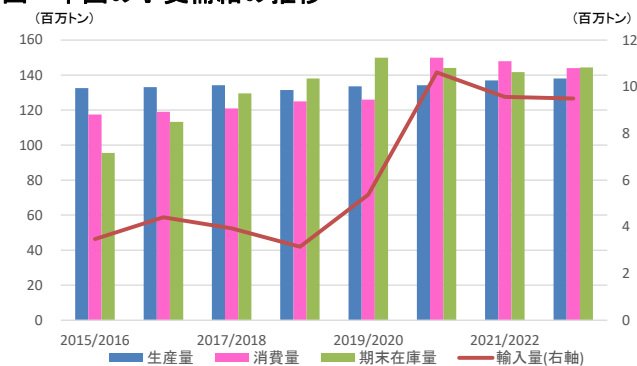


表 中国の小麦輸入量及び輸入先国

(輸出量万トン、シェア%)

2022年8月			2022年1月～2022年8月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	45.1	86.1	豪州	420.6	67.8	豪州	273.4	28.1
カナダ	7.2	13.8	フランス	144.5	23.3	米国	272.6	28.1
ロシア	0.1	0.1	カナダ	53.3	8.6	カナダ	254.0	26.1
-	-	-	カザフスタン	1.7	0.3	フランス	141.6	14.6
-	-	-	ロシア	0.2	0.0	カザフスタン	18.7	1.9
-	-	-	米国	0.0	0.0	リビア	6.6	0.7
その他	-	-	その他	0.0	0.0	その他	2.9	0.3
計	52.3	100	計	620.3	100	計	971.8	100

資料: 中国海関統計(2022. 9. 20)をもとに農林水産省で作成資料

< ロシア > 生産量は史上最高の 91.0 百万トン、期末在庫量も高水準

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく 91.0 百万トンと、前年度に比べ 21.1%増加し、史上最高となる見込み。

作期別の生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ 68.0 百万トン、23.0 百万トンの見込み。前年度に比べ、冬小麦の実生産量は 30.3%増加。冬期の枯死も少なく生育状況が良好であったことから収穫面積、単収が増加した。一方、春小麦は 0.2%の増加。

現地情報会社によれば、10 月初旬に春小麦の産地であるシベリアで収穫作業がおおむね終了。同地域の生産量(重量調整後)は、単収の減少から前年度(11.1 百万トン)に比べ 18.9%減少の 9.0 百万トン。

ロシア農業省の速報値によれば、10 月 7 日時点で、収穫済み面積は 28.6 百万ヘクタール、収穫進捗率は 97.0%となり、重量調整前の収穫量は 103.0 百万トン(前年度同時期 36.1%増)である。

一方、同省によれば、10 月 7 日時点で、2023/24 年度の冬穀物の播種済み面積は対前年度同期 4.8%減の 12.0 百万ヘクタールと、天候不順により遅れているが現在のところ大きな問題はない。また、同省は、穀物生産のコスト上昇は、国際価格水準が高いため、生産者にとって危機的な状況ではないとの見方を示している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく前年度に比べ 27.3%増加の 42.0 百万トンの見込み。同年度に入り、当初は輸出ペースが比較的低調であったものの、価格競争力が高いことから、今後の輸出量は増加すると見られている。

現地情報会社によれば、9 月の輸出量は 3.9 百万トンで前年度同月(4.7 百万トン)を 17.2%下回る。また、2022/23 年度の 2022 年 7 月から同年 9 月の輸出量は 9.6 百万トンで過去 3 年の同時期平均(11.6 百万トン)を 16.8%下回った。輸出先国は、エジプト(22.4%)、イラン(12.7%)、トルコ(11.6%)。

USDA によれば、2022/23 年度のロシアの期末在庫量は、当初低調であった輸出量が増加すると見られるものの、2021/22 年度の輸出枠や、継続する輸出関税賦課により期首在庫が豊富なことや、生産量の増加により、期末在庫量は 1994/95 年度以降で最高の 15.4 百万トンに積み上がる見込み。

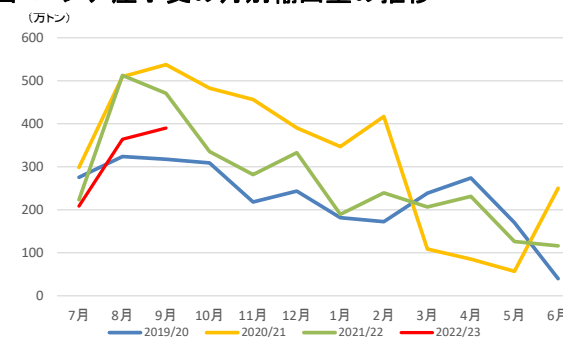
ウクライナからの穀物海上輸出に関する合意の期限を 11 月 19 日に迎えるが、この延長に関し、ロシア側は、国連との間で署名されたロシアからの食品と肥料の輸出に関する合意の履行に進展がないと主張。履行の条件が整わない場合、ウクライナ側の 4 者合意の更新を認めない可能性がある。

小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	91.0 (93.4)	-	21.1
消 費 量	42.5	42.8	45.0 (45.8)	-	5.3
うち飼料用	19.0	19.5	21.0 (20.5)	-	7.7
輸 出 量	39.1	33.0	42.0 (36.6)	-	27.3
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	15.4 (22.5)	-	38.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	17.7% (27.3%)	-	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	28.70 (28.7)	-	3.9
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17 (3.25)	-	16.5

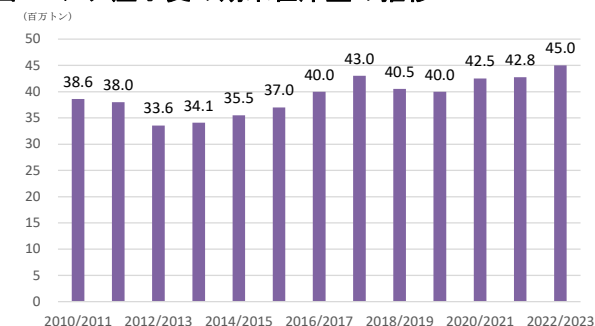
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図: ロシア産小麦の月別輸出量の推移



資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

図: ロシア産小麦の期末在庫量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2022. 10. 12)をもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 生産量は過去5年平均を26.6%下回る20.5百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、20.5百万トンの見込み。ロシアの侵攻により、前年度に比べ、収穫面積が29.1%、単収が12.4%減少し、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)に比べ37.9%減少、過去5年平均に比べ26.6%減少する見込み。

ウクライナ農業政策食料省(2022.10.21)によれば、2022/23年度の冬小麦、春小麦の収穫は終了。小麦全体の収穫面積は4.70百万ヘクタール、収穫量は19.4百万トン、単収は4.12トン/ヘクタール。

また、同省によれば、10月18日時点で、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は2.5百万ヘクタールで播種進捗率は61%である。なお、10月3日時点の播種予定面積は3.99百万ヘクタール。

ウクライナ東部では、オデッサ州の一部を除き、降雨により土壌水分が十分となり播種が進んだ。一方、北部、西部、中央部の大部分では、土壌水分過多によるヒマワリの収穫遅延から、その後に播種をする冬小麦の①播種の遅延、②播種面積の減少、③播種遅延に伴う越冬前の生育不足による冬枯れの懸念がある。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ41.6%減少の11.0百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、9月の小麦輸出量は前月に比べ100万トン増加したものの、前年度同月比では57%減の191万トン。同月の小麦輸出量は、主な穀物、油糧種子の輸出量686.8万トンの27.8%を占める。また、2022/23年度(2022年7月から2023年6月)の輸出量は321.7万トン。8月以降、黒海の港湾からの輸出再開で輸送効率が改善し、輸出量が増加した。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」(2022.10.21)によれば、9月30日現在、合意に基づく輸出量は548.7万トンで、そのうち小麦の輸出量は148.3万トンと全体の27.0%を占めている。輸出先国は、スペイン(24.5%)、トルコ(21.3%)、バングラデシュ(14.2%)の順。地域別には欧州諸国(33%)、アフリカ諸国(27%)、中東諸国(26%)、アジア諸国(14%)。

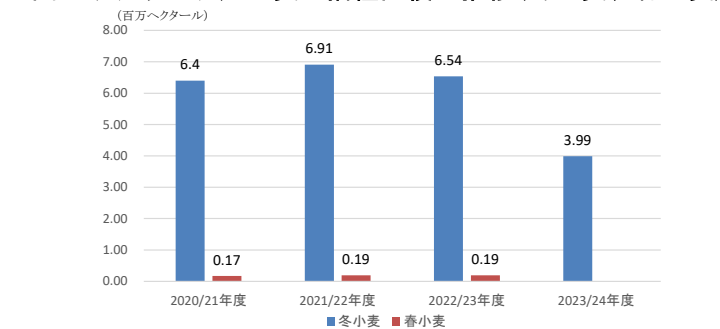
なお、黒海からの穀物輸送に遅れが生じている模様であるが、穀物輸送を行う船舶の急増等が要因とみられている。また、11月19日には、ウクライナからの穀物海上輸出に関する合意の期限を迎えるため協議が進められており、注視が必要。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	25.4	33.0	20.5 (21.5)	-	▲ 37.9
消 費 量	8.7	10.0	10.7 (8.2)	-	7.0
うち飼料用	2.6	4.0	5.5 (2.9)	-	37.5
輸 出 量	16.9	18.8	11.0 (13.0)	-	▲ 41.6
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 28.6
期末在庫量	1.5	5.8	4.7 (7.6)	-	▲ 18.9
期末在庫率	5.9%	20.1%	21.7% (35.7%)	-	1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.25 (5.5)	-	▲ 29.1
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.90 (3.90)	-	▲ 12.4

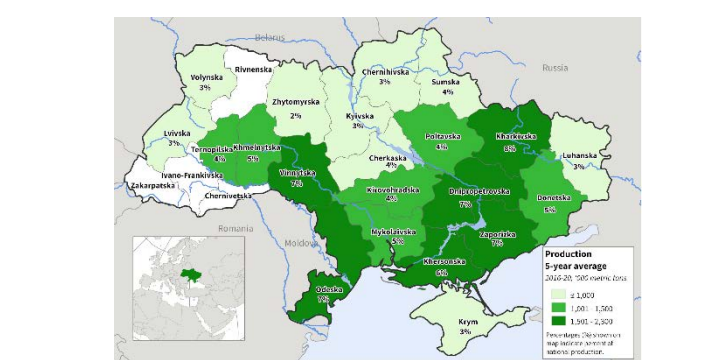
資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：ウクライナ産小麦の播種面積の推移(冬小麦、春小麦)



資料：ウクライナ国家統計庁、農業政策食料省、現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成
※2023/24年度の春小麦の播種は、2023年春に播種予定。

図：ウクライナの小麦生産地域と生産量



資料：USDA Global Crop Production maps

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ EU、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

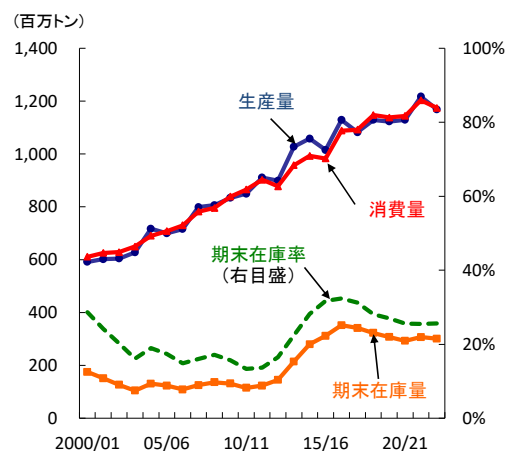
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ ウクライナ、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ ウクライナ等で上方修正も、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」(2022. 10. 12)をもとに農林水産省にて作成

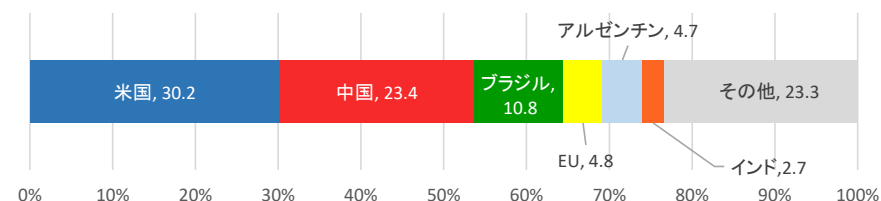
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

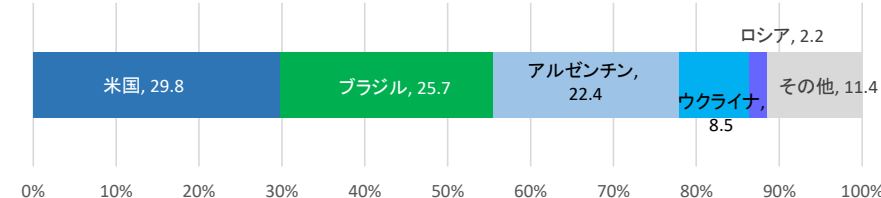
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,129.3	1,217.3	1,168.7	▲ 3.8	▲ 4.0
消 費 量	1,144.0	1,203.1	1,174.6	▲ 5.6	▲ 2.4
うち飼料用	723.9	752.0	740.2	▲ 2.8	▲ 1.6
輸 出 量	182.6	202.9	183.0	▲ 0.5	▲ 9.8
輸 入 量	185.0	183.9	179.0	0.7	▲ 2.7
期末在庫量	292.8	307.0	301.2	▲ 3.3	▲ 1.9
期末在庫率	25.6%	25.5%	25.6%	▲ 0.2	0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October 2022)

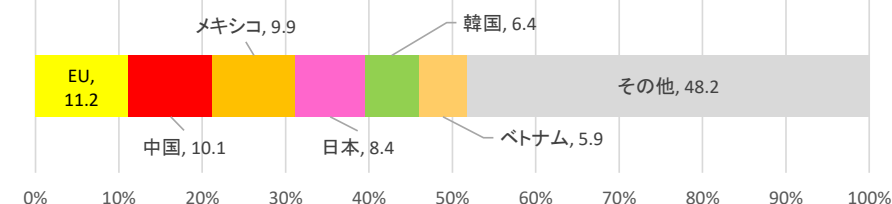
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,168.7 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(183.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(179.0 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、ネブラスカ州、カンザス州等のコーンベルト西部で８月から９月にかけての広範囲な干ばつの影響による単収の下方修正により前月予測から 1.2 百万トン下方修正され、前年度より 7.8%減の 353.0 百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2015/16 年度以来の低水準の見込み。

USDA「Crop Progress」（2022.10.17）によれば、収穫期の天候に恵まれ、主要 18 州における成熟進捗率は 94%と前年度同期（97%）より遅れているものの、過去 5 年平均（92%）より進んでいる。収穫進捗率は 45%と前年度同期（50%）より遅れているものの、過去 5 年平均（40%）より進んでいる。作柄評価は、生育期の干ばつの影響により、良からやや良が 53%と前年度同期（60%）を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.9%減の 304.8 百万トンの見込み。なお、消費量のうち、飼料用消費が前月予測から 1.3 百万トン上方修正される一方、エタノール用消費が同量下方修正された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正と最近の米国産の輸出需要の低迷に伴い、前月予測から 3.2 百万トン下方修正され、前年度より 13.0%減の 54.6 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高（2022 年 1 月 6 日～9 月 29 日）は、44.1 百万トンであり、内訳は中国（13.2 百万トン）、メキシコ（11.3 百万トン）、日本（8.2 百万トン）、コロンビア（2.8 百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、期首在庫量及び生産量の下方修正により前月予測から 1.2 百万トン下方修正され、前年度より 14.9%減の 29.8 百万トンで 2012/13 年度以来最低の見込み。期末在庫率は 8.3%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

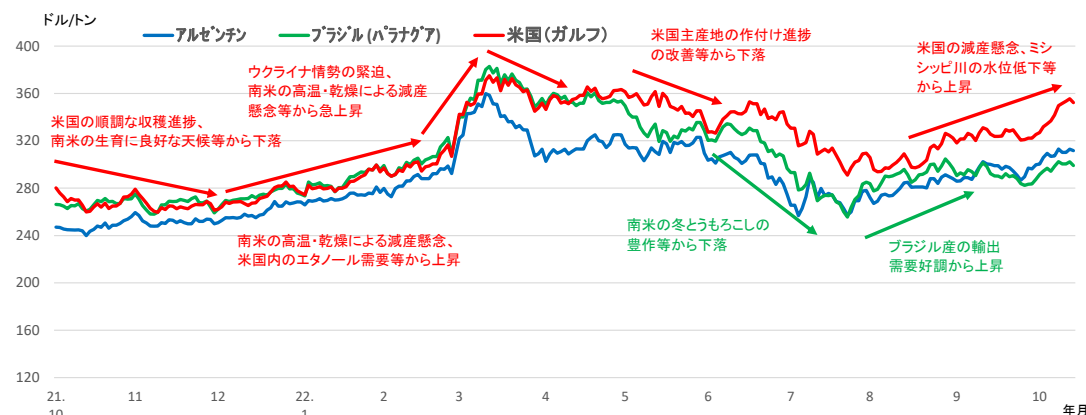
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	353.0	▲ 1.2	▲ 7.8
消 費 量	306.7	317.1	304.8	－	▲ 3.9
うち飼料用	142.3	145.2	134.0	1.3	▲ 7.7
エタノール用等	127.8	135.3	134.0	▲ 1.3	▲ 1.0
輸 出 量	69.8	62.8	54.6	▲ 3.2	▲ 13.0
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	0.6	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	29.8	▲ 1.2	▲ 14.9
期末在庫率	8.3%	9.2%	8.3%	▲ 0.3	▲ 0.9

（参考）

収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.72	－	▲ 5.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.79	▲ 0.04	▲ 2.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 October 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より8.6%増の126.0百万トンで史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.10.6)によれば、現在作付け中の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、単収の増加により、前年度比14.6%増の28.7百万トンの見込み。一方、大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、前年度比11.9%増の98.2百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比12.5%増の126.9百万トンで史上最高の見込み。(P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照)。

南部のパラナ州で10月17日現在、2022/23年度の夏とうもろこしの作付進捗率は78%と前年度同期(88%)より遅れている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で10月20日現在、夏とうもろこしの作付進捗率は70%と前年度同期(70%)並みとなっている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より5.5%増の77.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より5.6%増の47.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～9月の輸出量は24.7百万トンで、前年同期(12.8百万トン)と比べ1.9倍となっている。内訳は、1位がイラン4.7百万トン、2位がスペイン3.0百万トン、3位がエジプト2.9百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてブラジル産の中東・EU向け輸出が大幅に増加した。

とうもろこし－ブラジル

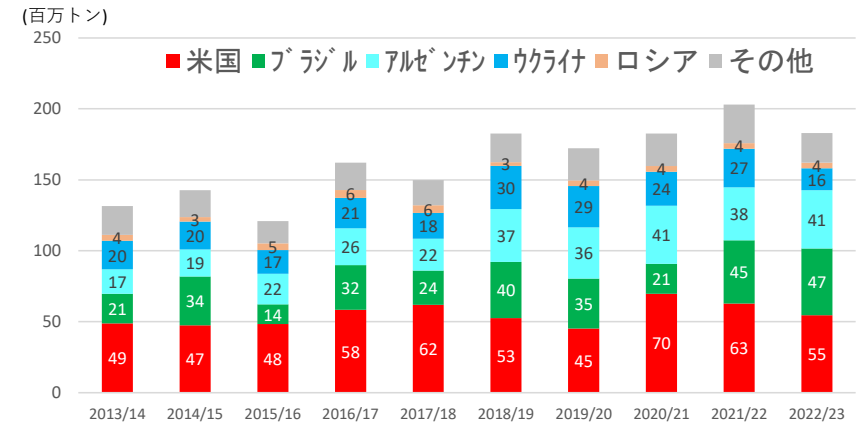
(大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4)

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	87.0	116.0	126.0 (123.1)	-	8.6	
消 費 量	70.0	73.0	77.0 (78.7)	-	5.5	
うち飼料用	59.5	62.0	65.5 (56.5)	-	5.6	
輸 出 量	21.0	44.5	47.0 (43.6)	-	5.6	
輸 入 量	2.9	2.3	1.3 (0.5)	-	▲ 43.5	
期末在庫量	4.2	5.0	8.3 (7.5)	0.3	66.7	
期末在庫率	4.6%	4.2%	6.7% (6.2%)	0.2	2.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	-	4.1	
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55 (5.65)	-	4.3	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.10.12)のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より6.8%増の55.0百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.10.20）によれば、降雨不足により2022/23年度の作付進捗率は17%で、過去5年平均（31%）より14ポイント遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より2.2%増の14.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より9.3%増の41.0百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～8月の輸出量は27.4百万トンで、前年同期（27.1百万トン）より0.9%増。内訳は、1位がベトナム4.0百万トン、2位が韓国3.7百万トン、3位がエジプト2.2百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてアルゼンチン産のアジア向け輸出が増加した。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019年12月14日、輸出税を約7%から12%へ引き上げ、その後継続している。

2021年12月17日、アルゼンチン農牧漁業大臣がとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。10月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は2021/22年度36百万トン、2022/23年度10百万トンと設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	52.0	51.5	55.0 (60.6)	-	6.8	
消 費 量	13.5	13.7	14.0 (20.7)	-	2.2	
うち飼料用	9.5	9.8	10.0 (15.8)	-	2.0	
輸 出 量	40.9	37.5	41.0 (41.0)	-	9.3	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.5)	-	-	
期末在庫率	2.2%	2.9%	2.7% (4.1%)	-	▲ 0.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.40	7.00 (8.20)	-	▲ 5.4	
単収(t/ha)	7.94	6.96	7.86 (7.40)	-	12.9	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

写真：北部サンタフェ州のとうもろこしの貯蔵施設風景
（10月1日撮影）1961年稼働開始、容量1万トン



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より0.5%増の274.0百万トンで史上最高の見込み。なお、政府補助金による大豆生産奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積は減少する見込み。

国家糧油情報センター（2022.10.9）によれば、9月は東北地区の天候はおおむね良好で、土壌水分量も十分にあり、成熟に有利となった。中国中央气象台（2022.10.3）によれば、10月上旬現在、東北地区の春とうもろこしは乳熟期から収穫期にある。一方、河南省等の夏とうもろこしも、乳熟期から成熟期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より18.2%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～8月の輸入量は16.9百万トンで、前年同期比で20.9%減。内訳は、米国産11.7百万トン（69%）、ウクライナ産4.9百万トン（29%）。5月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。（右図参照）

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年8月号」によると、8月の国内流通価格は、2,800 元/トンと前月（2,800 元/トン）から横ばいで推移。主な要因は、8月はとうもろこし市場の消費需要が弱く、とうもろこし加工は赤字となるため、多くの加工企業は集中的なメンテナンス期間に入ったほか、飼料企業の購入意欲も予想を下回ったためである。また、8月の輸入価格は、黒海からの穀物輸出再開に伴う国際相場下落により2,860 元/トンと前月（3,020 元/トン）から下落した。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要。

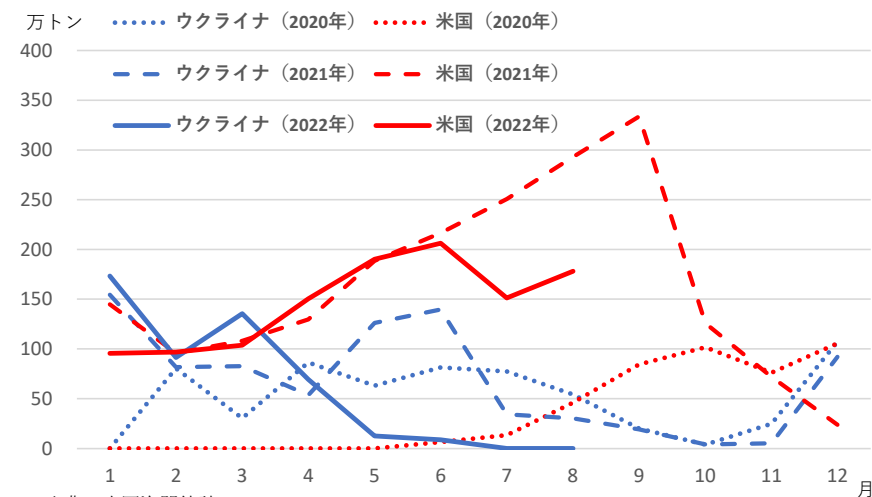
とうもろこしー中国

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	274.0 (273.0)	－	0.5	
消 費 量	285.0	291.0	295.0 (305.2)	－	1.4	
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (203.0)	－	2.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	－	－	
輸 入 量	29.5	22.0	18.0 (19.0)	－	▲ 18.2	
期末在庫量	205.7	209.2	206.2 (175.0)	▲ 1.0	▲ 1.4	
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.9% (57.3%)	▲ 0.3	▲ 2.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (42.50)	－	▲ 0.7	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.37 (6.42)	－	1.3	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > 輸出再開で輸出量は上方修正も、前年度より4割減

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、燃料や肥料等の生産資材不足もあり、収穫面積及び単収の減少から、史上最高の生産量となった前年度より25.2%減の31.5百万トンの見込み。

ウクライナ気象センターによれば、9月は寒冷で、平年以下の気温が続き、中旬以降は南部を除いて国内全域でかなりの降雨があり、9月10日頃から収穫が開始された。ウクライナ農業政策食料省によれば、10月21日時点で、収穫済面積は52.8万ヘクタール、収穫進捗率は12%。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、輸出量の上方修正に伴い、飼料用消費が前月予測から2.0百万トン下方修正され、前年度より6.1%減の10.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、干ばつで減産となったEU向け輸出の増加が見込まれることなどから、前月予測から2.5百万トン上方修正されたものの、前年度より42.6%減の15.5百万トンの見込み。また、2021/22年度の輸出量は、ウクライナからの穀物輸出に関する4者合意に基づく黒海の3港湾からの輸出再開を受け、前月予測から1.0百万トン上方修正され、2020/21年度より13.2%増の27.0百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省発表によれば、9月の輸出量は226万トンで、前月(185万トン)に比べ22%増。2021/22年度(2021年10月～2022年9月)の累計輸出量は、25.9百万トンで、2020/21年度(23.9百万トン)に比べ8%増。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」(2022.10.21)によれば、9月30日現在、輸出が再開された8月1日以降、黒海港湾からのとうもろこし輸出量は250万トン、輸出先国は、スペイン、トルコ、イタリア等である。

また、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から1.5百万トン下方修正され、前年度より2.2倍の9.9百万トンの見込みで、在庫が積み上がっている。

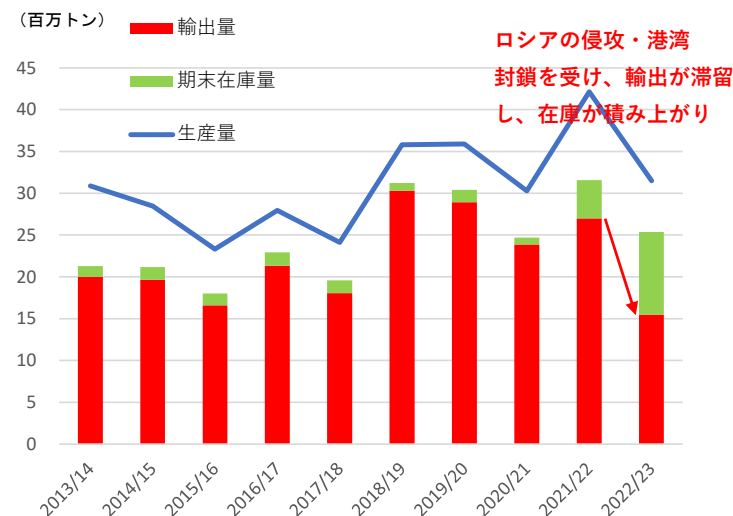
とうもろこしーウクライナ

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	30.3	42.1	31.5 (29.9)	-	▲ 25.2	
消 費 量	7.1	11.4	10.7 (10.9)	▲ 2.0	▲ 6.1	
うち飼料用	5.9	10.2	9.5 (5.5)	▲ 2.0	▲ 6.9	
輸 出 量	23.9	27.0	15.5 (17.0)	2.5	▲ 42.6	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	4.6	9.9 (8.9)	▲ 1.5	116.0	
期末在庫率	2.7%	11.9%	37.7% (32.1%)	▲ 6.6	25.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.50 (4.59)	-	▲ 18.0	
単収(t/ha)	5.62	7.68	7.00 (6.52)	-	▲ 8.9	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図: とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料: USDA 「PS&D」 (2022. 10. 12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド、パキスタン等で下方修正され、前月から下方修正された。

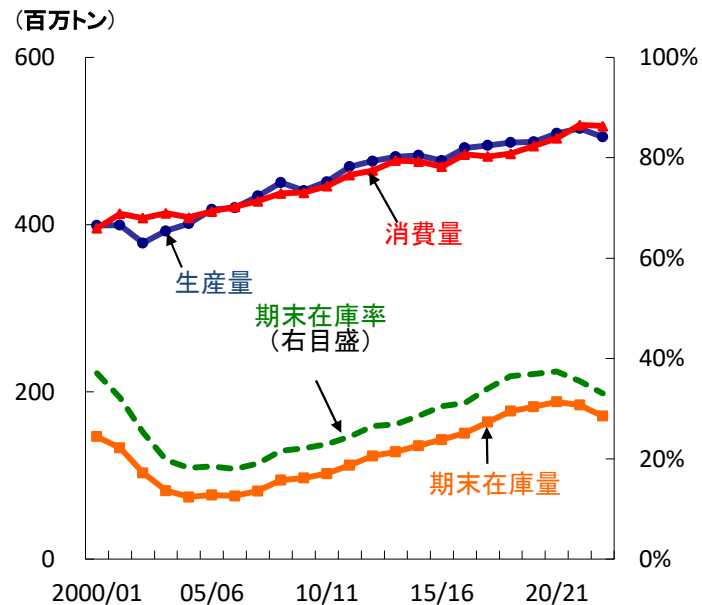
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・中国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ベトナム等で上方修正されたものの、インド、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022. 10. 12）をもとに農林水産省にて作成

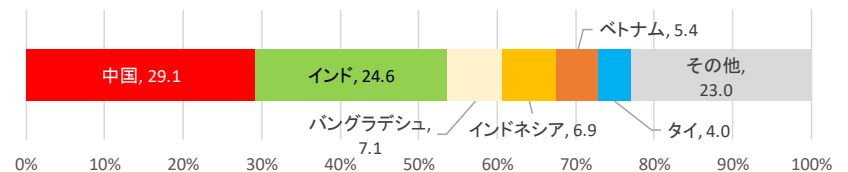
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

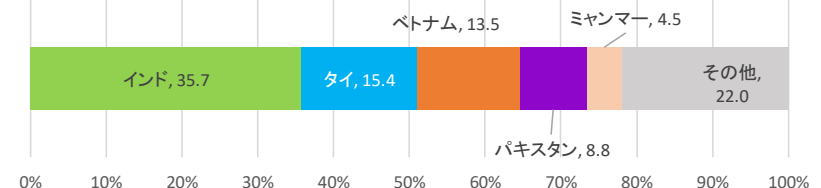
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	515.3	505.0	▲ 3.0	▲ 2.0
消 費 量	503.4	519.2	518.1	▲ 1.2	▲ 0.2
輸 出 量	50.9	55.5	53.2	▲ 0.4	▲ 4.1
輸 入 量	46.5	54.2	51.5	▲ 0.7	▲ 5.0
期末在庫量	188.2	184.3	171.2	▲ 2.4	▲ 7.1
期末在庫率	37.4%	35.5%	33.0%	▲ 0.4	▲ 2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October 2022)

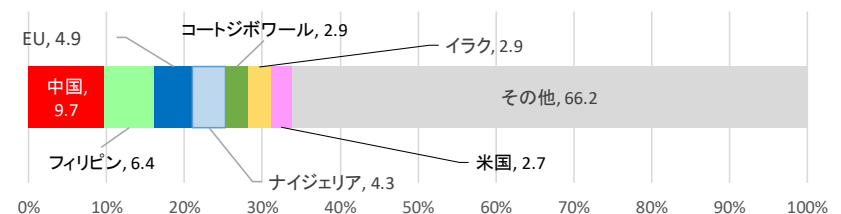
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(505.0百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(53.2百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(51.5百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 生産量減少により価格が高騰

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収の上方修正により、前月予測からわずかに上方修正されたものの、対前年度比13.8%減の5.3百万トンと、1993/94年度以来の低水準の見込み。収穫面積は、対前年度比で12.9%減少し、1983/84年度以来の低水準。このうちミシシッピ川下流域（長粒種の主産地）では、農業資材の高騰、大豆やとうもろこしの収益性の方が高いこと、作付期の降雨過多による作付減少により、主産地のアーカンソー州等で収穫面積が減少する見通し。また中・短粒種の国内生産の75%を占めるカリフォルニア州では、長引く厳しい干ばつによる灌漑用水不足や取水制限により、2年連続で減少し、1958/59年度以来の低水準の見込み。

同「Crop Progress」(2022.10.17)によると、主要6州における収穫進捗率は89%と、前年度同期、過去5年平均とともに1ポイント下回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少により対前年度比6.9%減の4.5百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比16.7%増の1.4百万トンと史上最高の見込み。アジアからの香り米の輸入が大半を占めている。

2022/23年度の輸出量は、輸出価格高騰による輸出競争力の低下見込みから、前月予測から0.1百万トン下方修正され、対前年度比8.8%減の2.4百万トンと、1991/92年度以来の低水準の見込み。

同「Rice Outlook」(2022.10.14)によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間上昇しており、10月11日までの週のイラク向け長粒種（2等、碎米4%混入）は725ドル/トンと、2008年10月初旬以来の高値となった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。また、中粒種の価格は、地中海向けカリフォルニア米（1等、碎米4%混入）で1,625ドル/トンと、過去最高を更新した。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

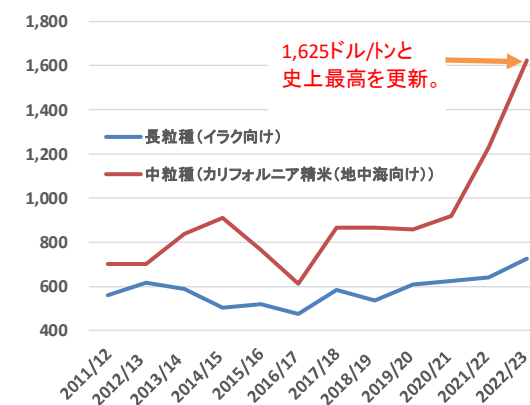
(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.3	0.0	▲ 13.8
消費量	4.9	4.8	4.5	-	▲ 6.9
輸出量	3.0	2.6	2.4	▲ 0.1	▲ 8.8
輸入量	1.1	1.2	1.4	-	16.7
期末在庫量	1.4	1.3	1.1	0.1	▲ 16.7
期末在庫率	17.8%	17.0%	15.3%	1.2	▲ 1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.52	0.02	▲ 1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)

図：米国の長粒種と中粒種の輸出価格の推移

(単位：ドル/トン)



資料：USDA「Rice Outlook」(2022.10.14)より。価格は年度内の平均価格。

なお、2022/23年度は2022年10月の価格。

< インド > 生産量、輸出量ともに下方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、インド政府が公表した第1回推計に基づき、前月予測から2.5百万トン下方修正され、対前年度4.8%減の124.0百万トンとなる見込み。これは、モンスーン期の降雨不足による作付減少が背景にある。

乾燥が続いていた主産地のウッタル・プラデーシュ州等北東部では、9月初旬までの降雨が不十分だったため、カリフ米（インドのコメ生産量の85%を占める）の収穫面積が対前年度比で1.9%減少する見込み。なお、例年より南西モンスーンの終了が遅れ、9月中旬以降、インドの主産地では降雨が続いているため、コメの収穫作業への影響が懸念されている。モンスーンの完全な終了は10月中旬の見込み。

インド農業農民福祉省（2022.9.30）の最終公表値によると、カリフ米作付済面積は、9月30日時点で40.29百万ヘクタールと、前年度同期（42.30百万ヘクタール）に比べて2.02百万ヘクタール減となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少から、対前年度比1.4%減の109.3百万トンの見込み。

2021/22年度の消費量は、政府の低所得世帯向け食料配給プログラム等によるコメの追加供給で、前月予測から1.3百万トン上方修正され、対2020/21年度比9.6%増の110.8百万トンと、史上最高となった。

USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正により、前月予測から1.0百万トン下方修正され、対前年度比11.6%減の19.0百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰防止のため、9月9日に輸出規制（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））を発動した。ただし、依然として世界の輸出量の36%を占め、世界第1位の輸出国となる見込み。

インド食料公社（FCI）によると、2022年9月の備蓄量（粳を含む）は40.6百万トンと、前年同期（44.4百万トン）を下回るが、過去5年平均（31.0百万トン）を9.6百万トン上回る。

同「Grain: World Markets and Trade」（2022.10.12）によれば、インド産米（碎米5%混入）の10月11日までの価格は、390ドル/トンと前月から上昇したものの、依然、アジア主要輸出国の中で最も低い価格水準となっている（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメーインド

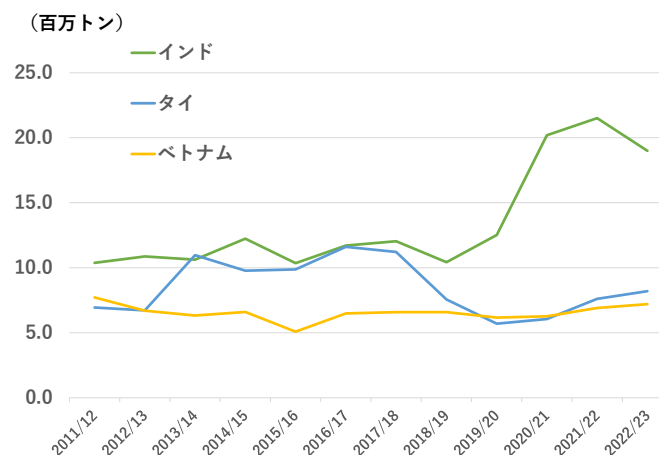
雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	124.4	130.3	124.0 (125.9)	▲ 2.5	▲ 4.8
消 費 量	101.1	110.8	109.3 (109.5)	-	▲ 1.4
輸 出 量	20.2	21.5	19.0 (15.5)	▲ 1.0	▲ 11.6
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	37.0	35.0	30.8 (36.3)	▲ 3.0	▲ 12.1
期末在庫率	30.5%	26.5%	24.0% (29.1%)	▲ 2.1	▲ 2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	45.77	46.38	45.50 (45.00)	-	▲ 1.9
単収(もみt/ha)	4.08	4.21	4.09 (2.80)	▲ 0.08	▲ 2.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2022.10.12）をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 中国の飼料用米需要が下方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比1.3%減の147.0百万トンの見込み。

国家糧油情報センター（2022.10.9）によれば、9月、一期作稲の大部分が成熟後期にある黒竜江省等東北部は天候に恵まれた。また、長江の中・下流及びその南部のほとんどの地域も、気温が高く、降水量が少なかったため、多くの地域で一期作稲の成熟や収穫に好ましい天候となった。なお、9月下旬に収穫・販売された一期作稲の品質は、前年度に比べて良くなっているが、精米歩留まり等は例年に比べて低下していると見られる。

また、長江の中・下流及びその南部のほとんどの地域では、良好な天候の下、二期作晩稲の出穂と開花も進んだ。ただ、安徽省、江西省中北部、湖南省西部等の一部地域は干ばつ気味で、二期作晩稲の成長と発育にやや影響があった。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、飼料用米の消費量の引下げから、前月予測から1.1百万トン下方修正され、対前年度比0.9%減の155.0百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、碎米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通し及びインドのコメ輸出規制により、前月予測から0.5百万トン下方修正され、対前年度比16.0%減の5.0百万トンの見込み。中国は、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入していた。

中国海関統計によれば、2022年1～8月の輸入量は、対前年同期の3.2百万トンから約43%増加し、4.5百万トンとなった。輸入先はインドが1.8百万トンと最も多く、次いでパキスタンが1.1百万トンとなっている。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から0.6百万トン上方修正されたものの、対前年度比4.6%減の107.8百万トンとなる見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が依然として約6割を占める見通し。

コメー中国

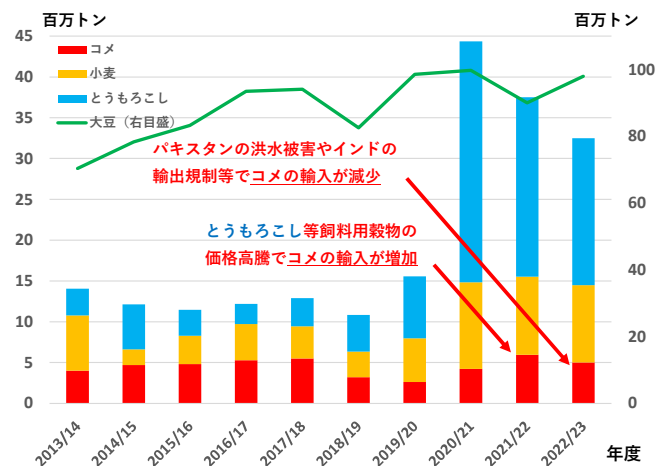
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位: 百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、()はIGC			
生 産 量	148.3	149.0	147.0 (146.3)		-	▲ 1.3
消 費 量	150.3	156.4	155.0 (151.4)		▲ 1.1	▲ 0.9
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.3)		-	5.8
輸 入 量	4.2	6.0	5.0 (3.0)		▲ 0.5	▲ 16.0
期末在庫量	116.5	113.0	107.8 (103.5)		0.6	▲ 4.6
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.6% (67.4%)		0.9	▲ 2.7
(参考)						
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00 (30.03)		-	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.00 (4.87)		-	▲ 1.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」 (22 September 2022) (単収は精米t/ha)

図: 中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



資料: USDA 「PS&D」 (2022. 10. 12) をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22 年度の実産量は、良好な天候と十分な降雨により、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、対 2020/21 年度比 5.3% 増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量も、同様の気象条件を前提とすれば、雨季作及び乾季作の作付けが増え、収穫面積が拡大すると予測されることから、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、対前年度比 1.1% 増の 20.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の輸出量は、豊作とインドの輸出規制による輸出量減少の見込みから、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、対前年度比 7.9% 増の 8.2 百万トンの見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、イラクの予想以上の輸入需要増大により、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、対 2020/21 年度比 24.6% 増の 7.6 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年 1～7 月の輸出量は、対前年同期の 2.7 百万トンから約 54% 増加し、4.1 百万トンとなった。輸出先はイラクが 0.8 百万トン（対前年度比 6.3 倍）、米国が 0.4 百万トン（対前年度比 1.4 倍）、南アフリカが 0.4 百万トン（対前年度比 1.1 倍）、中国が 0.3 百万トン（対前年度比 1.7 倍）。

USDA「Rice Outlook」（2022.10.14）によれば、10 月 11 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、バツ安にも関わらず、主に中央アジアと中東からの需要増大により、9 月 6 日までの週の価格から 3 ドル上昇し、430 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	18.9	19.9	20.1 (20.1)	0.3	1.1	
消 費 量	12.7	12.8	12.9 (12.3)	▲ 0.1	0.8	
輸 出 量	6.1	7.6	8.2 (8.3)	0.2	7.9	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	4.3	4.0	3.2 (6.4)	0.3	▲ 20.2	
期末在庫率	22.8%	19.4%	15.0% (31.0%)	1.5	▲ 4.4	

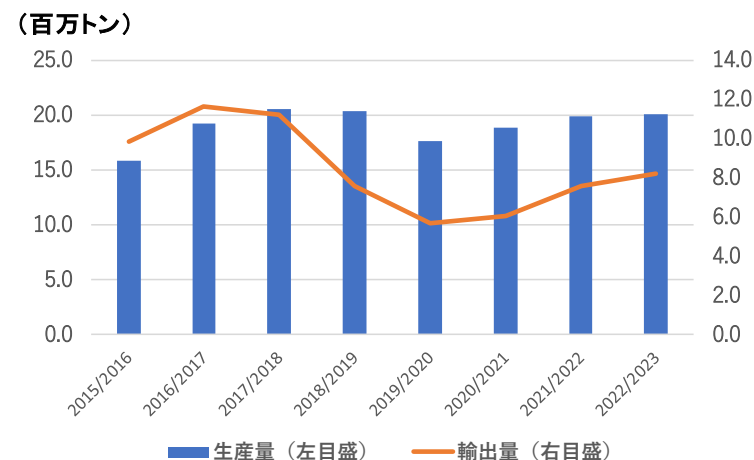
(参考)

収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.70)	0.15	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.81 (1.88)	0.01	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)

IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)（単収は精米t/ha）

図：タイの生産量・輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.10.12)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > インドの輸出規制による代替需要増で輸出価格が上昇

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が6.01トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比1.2%増の27.4百万トンの見込み。

2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高収益作物（野菜等）への転作等により冬春作の収穫面積が減少したこと等から、対2020/21年度比1.1%減の27.1百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、予想以上の需要増加が継続する見込みや、インドの輸出規制による輸出減少見込みから、前月予測から0.4百万トン上方修正され、対前年度比4.3%増の7.2百万トンの見込み。

2021/22年度の輸出量も、同様の理由から、前月予測から0.2百万トン上方修正され、対2020/21年度比9.5%増の6.9百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022年1～8月の輸出量は4.8百万トンで、上位からフィリピン（2.3百万トン）、中国（0.5百万トン）、コートジボワール（0.5百万トン）となっている。うちジャポニカ米は0.2百万トン。

USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、ベトナム国内で飼料向け等に利用されていたインドの碎米の輸出禁止措置により、対前年度比50.0%減の0.7百万トンの見込み。

なお2021/22年度の輸入量は、カンボジアからの輸入増加（主として粳）等により、前月予測から0.4百万トン上方修正され、対2020/21年度比22.2%減の1.4百万トンの見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2022.10.12）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の10月11日までの週の価格は、インドの輸出規制、インド産米の主要輸入国であったバングラデシュからの代替需要増大により、9月6日までの週の価格から上昇して、429ドル/トンとなった。



写真：ベトナム北部ハノイ市の圃場（10月7日撮影）

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

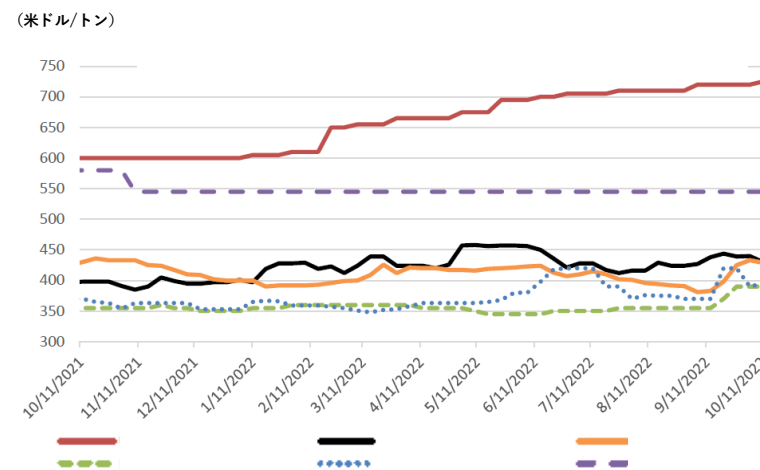
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年1月～23年12月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.4	27.1	27.4 (28.5)	-	1.2	
消 費 量	21.5	21.5	21.5 (22.5)	-	-	
輸 出 量	6.3	6.9	7.2 (6.8)	0.4	4.3	
輸 入 量	1.8	1.4	0.7 (0.6)	-	▲ 50.0	
期末在庫量	2.6	2.7	2.1 (2.8)	▲ 0.3	▲ 22.1	
期末在庫率	9.5%	9.5%	7.4% (9.4%)	▲ 1.0	▲ 2.2	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.29	7.29 (7.23)	-	-
単収(もみt/ha)	6.00	5.95	6.01 (3.95)	-	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 October 2022）
IGC「Grain Market Report」（22 September 2022）（単収は精米t/ha）

図：長粒種のFOB価格の推移



資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」（2022.10.12）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国等で下方修正も、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

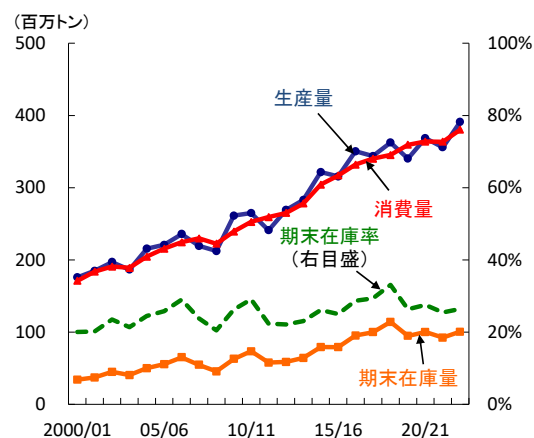
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・アルゼンチン等で下方修正も、ブラジル、中国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、パラグアイで下方修正も、アルゼンチン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」(2022. 10. 12)をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

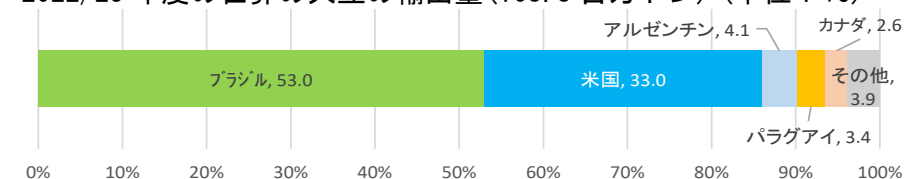
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率 (%)
生産量	368.4	355.7	391.0	1.2	9.9
消費量	363.8	363.6	380.2	2.6	4.6
うち搾油用	315.4	314.7	329.4	2.4	4.7
輸出量	164.9	154.2	168.8	1.0	9.5
輸入量	165.5	154.4	166.2	1.2	7.7
期末在庫量	100.1	92.4	100.5	1.6	8.8
期末在庫率	27.5%	25.4%	26.4%	0.2	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October 2022)

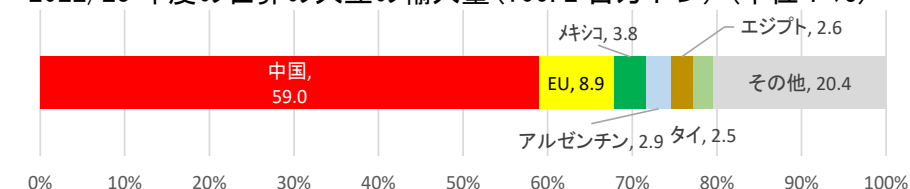
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (391.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (168.8 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (166.2 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 単収の下方修正により、生産量は減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、アイオワ州、インディアナ州、カンザス州、ネブラスカ州等の単収が下方修正されたことで、前月予測から1.8百万トン下方修正され、対前年度比3.4%減の117.4百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、収穫期の天候に恵まれ、主要18州における落葉進捗率は96%と前年度同期及び過去5年平均(ともに94%)より進んでいる。収穫進捗率は63%と前年度同期(58%)及び過去5年平均(52%)より進んでいる。作柄評価は良からやや良が57%と前年度同期(59%)を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、大豆製品需要の高まりと搾油マージンの改善により搾油用消費量が上方修正されたことなどから前月予測から0.2百万トン上方修正され、前年度より2.2%増の64.2百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、ブラジル、アルゼンチンとの輸出競争の高まりや生産量の下方修正に伴い、前月予測から1.1百万トン下方修正され、前年度より5.2%減の55.7百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～9月29日)は、27.9百万トンであり、内訳は中国(10.9百万トン)、メキシコ(3.8百万トン)、エジプト(2.5百万トン)、ドイツ(1.7百万トン)、日本(1.7百万トン)の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より27.0%減の5.4百万トンの見込み。なお、期末在庫率は4.5%で、前年度を下回り、2013/14年度以来の低水準の見込み。

大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	114.8	121.5	117.4	▲ 1.8	▲ 3.4
消費量	60.9	62.8	64.2	0.2	2.2
うち搾油用	58.3	60.0	60.8	0.3	1.4
輸出量	61.7	58.7	55.7	▲ 1.1	▲ 5.2
輸入量	0.5	0.4	0.4	-	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	5.4	-	▲ 27.0
期末在庫率	5.7%	6.1%	4.5%	0.0	▲ 1.6

(参考)
収穫面積(百万ha) 33.43 34.93 35.06 - 0.4
単収(t/ha) 3.43 3.48 3.35 ▲ 0.05 ▲ 3.7
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格(FOB)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量も史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、単収は下方修正も、主産地での史上最高の大豆価格に後押しされた収穫面積の上方修正により前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、前年度より 19.7%増の 152.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマット・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告（2022.10.6）によれば、2022/23年度の実産量は、ラニーニャ現象から南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より 21.3%増の 152.4 百万トンで史上最高の見込み。

作付進捗率は、中西部のマット・グロッソ州で 10 月 14 日現在、41%で過去 5 年平均(24%)より進み、南部のパラナ州で 10 月 17 日現在、33%で前年度同期（38%）より遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から 1.3 百万トン上方修正され、前年度より 1.6%増の 55.1 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度より 12.5%増の 89.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1 ～ 9 月の輸出量は 70.8 百万トンで、前年同期（77.5 百万トン）に比べ 8.7%減となっている。内訳は、1 位が中国 47.4 百万トン、2 位がスペイン 3.1 百万トン、3 位がタイ 2.2 百万トンとなっている。なお、9 月の輸出量は 4.3 百万トンで前年同月（4.8 百万トン）と比べ、11.0%減となっている。

大豆－ブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	127.0	152.0 (146.0)	3.0	19.7	
消 費 量	49.9	54.3	55.1 (52.2)	1.3	1.6	
うち搾油用	46.7	51.0	51.5 (49.4)	1.0	1.0	
輸 出 量	81.7	79.6	89.5 (90.7)	0.5	12.5	
輸 入 量	1.0	0.6	0.8 (0.4)	-	36.4	
期末在庫量	29.4	23.2	31.3 (5.1)	2.0	35.2	
期末在庫率	22.4%	17.3%	21.7% (3.5%)	1.1	4.3	

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	42.90 (42.00)	0.90	3.4
単収(t/ha)	3.53	3.06	3.54 (3.48)	▲ 0.01	15.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培予定。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2022. 10. 6）

＜ アルゼンチン ＞ 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.5 倍（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より 15.9%増の 51.0 百万トンと史上最高の見込み。11 月以降に作付けが本格的に開始される。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、搾油用消費量の下方修正により前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加に伴い、前年度より 1.7%増の 47.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、9 月末までの為替優遇措置による農家売渡しの急増に伴い、前月予測から 2.3 百万トン上方修正され、前年度より 2.5 倍の 7.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～8 月の輸出量は 128.5 万トンで、前年同期 (414.4 万トン) より 69.0%減。内訳は、1 位が中国 94.8 万トン、2 位が米国 8.7 万トン、3 位がチリ 3.4 万トンとなっている。

アルゼンチンは、丸大豆より搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第 1 位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%に設定。さらに、2022 年 3 月 19 日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスリリースによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げ、大豆と横並びの 33%に変更した。

また、2022 年 9 月 4 日にアルゼンチン政府は、足元の公式為替レートの 139 ペソ/ドルから 9 月末まで丸大豆輸出のみに適用される為替優遇措置（200 ペソ/ドル）を大豆農家に対して発表したことにより、これまで滞留していた農家の大豆売渡が加速した。なお、ブエノスアイレス穀物取引所によれば、農家は 2021/22 年度の大豆生産量の 37%に相当する 16 百万トン以上を 9 月に販売したとみられる。

大豆－アルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	46.2	44.0	51.0	(48.0)	-	15.9
消 費 量	47.4	47.0	47.8	(48.2)	▲ 0.5	1.7
うち搾油用	40.2	39.8	40.5	(42.2)	▲ 0.5	1.9
輸 出 量	5.2	2.8	7.0	(4.6)	2.3	150.0
輸 入 量	4.8	3.9	4.8	(4.7)	-	24.7
期末在庫量	25.1	23.2	24.2	(3.9)	▲ 1.2	4.5
期末在庫率	47.6%	46.5%	44.2%	(7.3%)	▲ 3.8	▲ 2.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00	(16.65)	-	6.3
単収(t/ha)	2.81	2.75	3.00	(2.88)	-	9.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の作付け前のほ場風景
(10月6日撮影)



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府の補助金による大豆生産奨励策で収穫面積が増加したことから、前年度より12.2%増の18.4百万トンの見込み。

中国農業農村部によれば、9月26日現在、大豆の収穫進捗率は16.5%となっている。中国中央气象台(2022.10.3)によれば、10月上旬現在、黒竜江省等東北地区はおおむね成熟期後半から収穫期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、輸入量の上方修正に伴い、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度低迷していた畜産向け国内大豆粕需要の回復により、前年度より9.2%増の116.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、南米の輸出量の増加に伴い、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度より8.9%増の98.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～8月の輸入量は61.3百万トンと、前年同期比で8.6%減。内訳は、ブラジル産40.9百万トン(67%)、米国産18.2百万トン(30%)。今後は、米国の収穫開始に伴い、輸入先が徐々に米国産に切り替わるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年8月号」によると、8月は、季節的に大豆需要が低調となる時期にあり、国内価格(山東省の国産大豆工場渡し価格)は、前月(6,520元/トン)から横ばいの6,520元/トンとなったものの、依然として高水準で推移している。大豆需要は好転しつつあり、今後、新穀大豆が市場に出荷されるまで、国内価格は高値で推移するとみられる。8月の輸入価格(山東省の輸入大豆価格)は、8月末の米国大豆産地の高温・乾燥の影響等で5,040元/トンと前月(4,920元/トン)から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

大豆—中国

(単位: 百万トン)

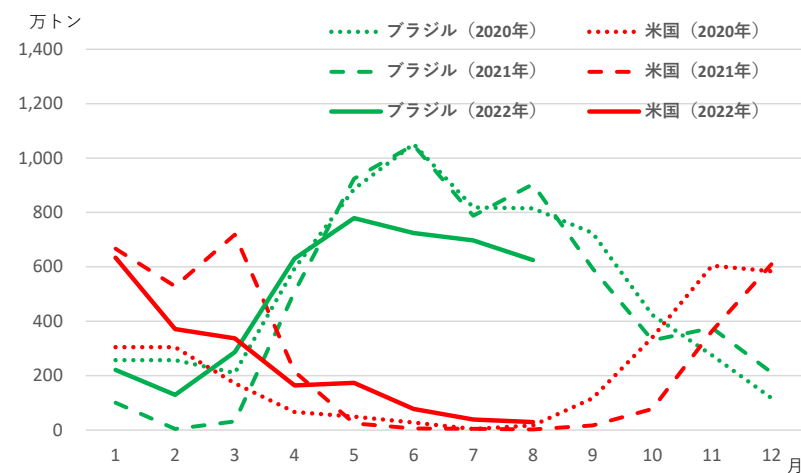
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.6	16.4	18.4 (19.5)	-	12.2	
消 費 量	112.7	106.7	116.6 (114.2)	1.0	9.2	
うち搾油用	93.0	87.0	96.0 (95.5)	1.0	10.3	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
輸 入 量	99.8	90.0	98.0 (96.3)	1.0	8.9	
期末在庫量	31.2	30.7	30.5 (31.4)	-	▲ 0.9	
期末在庫率	27.6%	28.8%	26.1% (27.5%)	▲ 0.2	▲ 2.7	

(参考)

収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	9.35 (9.90)	-	11.3
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97 (1.97)	-	1.0

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収の上方修正により前月予測から0.1百万トン上方修正され、収穫面積は減少するものの、前年度より3.6%増の6.5百万トンの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2022.9.20～10.12）によれば、主産地のカナダ南東部では、9月中旬から9月末にかけて温暖な天候と降雨があり、大豆の生育・成熟に好ましい状況となった。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.10.21)によれば、主産地のオンタリオ州などカナダ南東部で収穫はほぼ終了している。2022/23年度の収穫面積は前年度より1.7%減の一方、単収は西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、前年度高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より44.3%増と増加し、カナダ全体の単収が5.4%増となることから、生産量は前年度より3.7%増の6.5百万トンの見込み。

産地のマニトバ州クロップレポート（2022.10.18）によれば、収穫進捗率は83%となっている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.8%増の2.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.9%増の4.4百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23年度（2022年8月～2023年7月）のうち、2022年8月の輸出量は2.1万トンで、国別では、主にベルギー（2.1万トン）向け。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.4	6.3	6.5 (6.5)	0.1	3.6
消費量	2.5	2.4	2.5 (2.5)	-	2.8
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	-	0.3
輸 出 量	4.7	4.3	4.4 (4.4)	-	2.9
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6
期末在庫量	0.3	0.4	0.6 (0.3)	0.1	30.4
期末在庫率	4.1%	6.4%	8.1% (4.3%)	1.5	1.7

(参考)

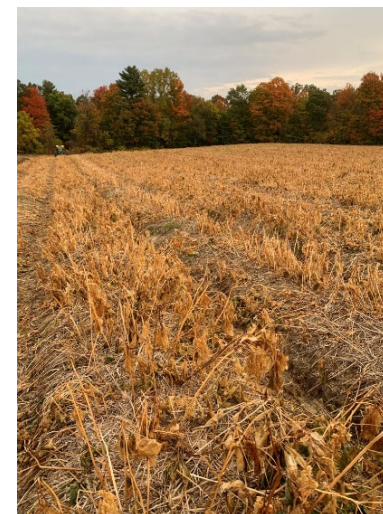
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.10 (2.10)	-	▲ 1.4
単収(t/ha)	3.12	2.94	3.10 (3.10)	0.05	5.4

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 October 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 October 2022)

写真：カナダ南東部オンタリオ州の収穫直前の大豆風景 (10月13日撮影)



(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	

1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等
-------------	----------	---------	----	-----

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国

1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
------------	-----	-----	-----

1斤	500g	重量	中国
----	------	----	----

華氏→摂氏：℃=(° F-32)÷1.8			
----------------------	--	--	--